

**はしがき** MTS(海上交通システム研究会)\*1の第126回例会「海事の楽しみ(第9回)」は2015年7月23日神戸海洋博物館・研修室で開催された。ここで発表された3篇の講演の内の2編「信長と九鬼嘉隆の鉄甲船 阿武丸」平田紘士\*2、「神戸港の歴史と港づくり」森田 潔は共に個人的にも長らく関心を持っているテーマであったが、私はこの独立した二つの発表から、共に触れられていない次の事をすぐに連想した。それは

「九鬼水軍\*3が転封された三田藩の輝き」と、  
「三田藩が神戸の発展への貢献」 等である。

：九鬼氏は信長の石山本願寺攻めにおける鉄甲船の活躍等で水軍の雄としての海賊大名として知られるが、後に秀吉にも仕える。関ヶ原の戦いの後、志摩・鳥羽(三重県鳥羽市)から摂津・三田(神戸市北隣の三田市)に転封される。これは、瀬戸内海の村上水軍\*4も含めて海の勇者を山の中に押し込む江戸幕府の一連の政策による。このシーパーワーなき鎖国政策のつけは二百数十年後の江戸幕府崩壊の遠因となるが、その中で三田藩は健闘し明治へと生き続ける。：そして、幕末から明治開明期にかけて、多くの俊秀が活躍する。維新後は藩主自らいち早く海外に門戸を海外に開く将来性に着目して神戸に移住し活躍する。これ等の過程で幾つかの私の個人的な接点もある。概要をまとめた。\*1、\*2、\*3については、本文末の注を参照。 この報告は、MATRIX No.90(October 20,2015)に掲載されたものの改訂版。

## 1.鳥羽から三田、そして神戸へ、海・船・熊野への回帰

「熊野水軍\*6の雄」として幾多の華々しい戦果を馳せた九鬼藩は、海の無い山国の摂津三田藩に移封されてのち、明治維新・廃藩置県により、藩としての組織は消滅する。然し、明治以降水軍、武士団から新時代に適応脱皮して、明治の開明期を生きいきと神戸と言う新天地で活躍、成果を残すとともに、学問・政治の分野に活躍、多くの俊秀を輩出するとともに、今日に繋がっていることに特徴がある。

九鬼・三田藩の消滅は、関ヶ原の戦いの後、伊勢志摩の鳥羽藩から移封(1633、西暦年号。以下同様)されてから約238年後の、明治維新に続く廃藩置県・明治4年(M4,1871)のことである。然し、その後、間をおかず藩主・九鬼隆義以下多くの家臣は神戸に移住。三田に残る藩士等は僅かになったといわれる。「明治開明期の開港地神戸」の発展に彼らは大きな貢献をする。これは三田という山国に陸封されたとは言え、熊野灘に面した九鬼浦から発展した水軍九鬼氏のルーツである「海への回帰」をはたした事を思わせる。

幕末の困難期に藩内から抜擢されて財政改革、文教向上に成果を挙げ、更に神戸に移っても更に輝くのは「白洲退蔵、小寺泰次郎」註等であり、それに続く子、孫と続く後継者の活躍も素晴らしい。「白洲文平、白洲次郎、小寺謙吉等」註である。神戸港の発展に三田藩の人々の活躍を忘れることはできない。又、私のお世話になった川崎造船所の初代社長松方幸次郎註(1865～1950、在任1896～1927)ともつながる。一方、九鬼・三田藩では科学技術の科学の祖と言われる「川本幸民、心理学の創設者元良勇次郎」など俊秀を輩出している。特に「元良勇次郎に続く信太郎、誠三各氏」註は紛れもなく海と船の世界に大きな成果を上げて、更に「海への回帰・飛躍」の水軍DNAを印象づける。その元良誠三・東大名誉教授は私の恩師でもある。

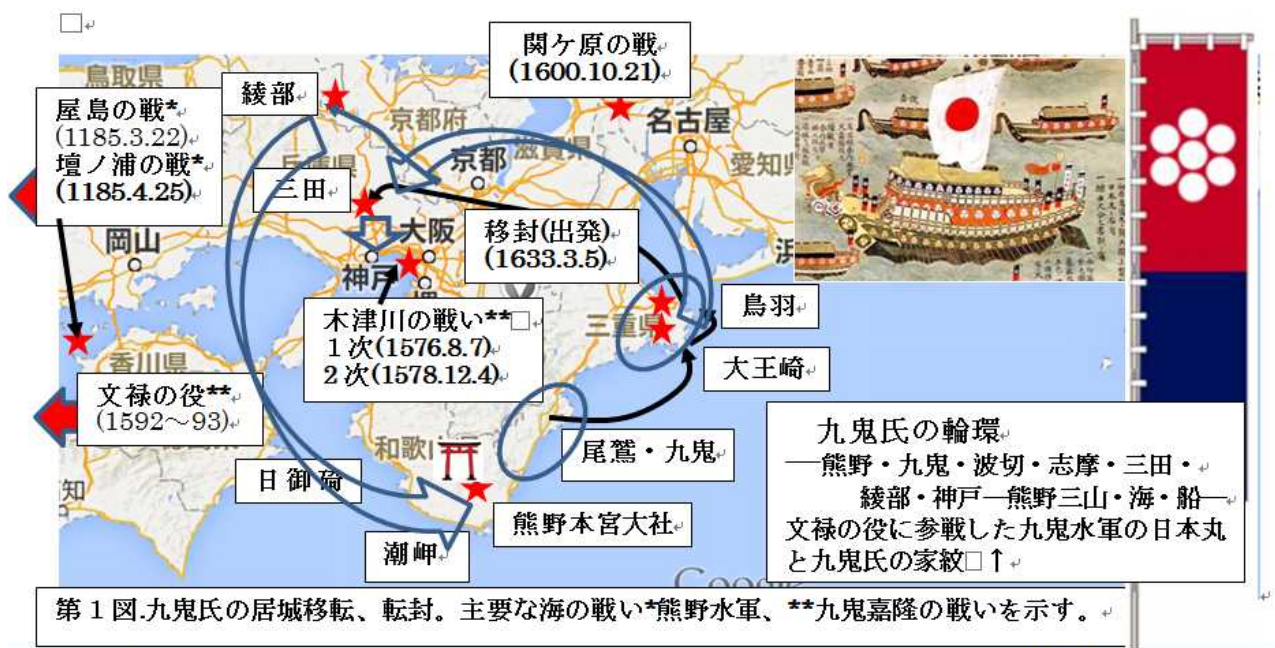
またこの他にも「九鬼隆一」(文部官僚)の他に新島襄同志社開校)、福沢諭吉(慶応義塾創設者)など多

彩や先駆者たちとの交流が登場する。

更に付け加えれば、鳥羽から同時に分離移封された綾部九鬼家の当主は、熊野本宮大社宮司として、熊野水軍のルーツと言われる紀伊熊野の地に里帰りしている。之も因縁の回帰を感じさせるに十分である。一方で、この水軍・九鬼藩を海の無い土地への移封(陸封)を意識的に行う徳川幕府の鎖国政策は、大きな問題点を感じさせる。

それは、15世紀半ばから世界は海の時代、それもヨーロッパからインド・東アジア、我がジパングに向けての大航海時代に雄飛したポルトガル、スペイン降ってはオランダ、イギリスに比べても劣らない島国としての恵まれた地理的環境と7世紀以前にまで遡り、倭寇に象徴される我が国の海洋ポテンシャルを持ちながら、幕末・明治開明期にかけて彼らからの植民地支配の危機にさらされたこと等、水軍力を無視した鎖国政策の影響は深い。然し、此处では、特に取り上げないこととする。

第1図は熊野、志摩、摂津(大阪、神戸、三田)、とその他の位置関係などと、主要事件の年代を示す。



## 2.熊野水軍・九鬼氏 九鬼から波切、鳥羽へ(以下、4ケタ数字は西暦年、M.は明治、S.は昭和)

### 2.1 九鬼嘉隆(天文 11、1542~慶長 5、1600)は、波切城に生まれる。8代当主となる。

九鬼嘉隆は、九鬼定隆の3男として、志摩・波切城で誕生。長じては、熊野水軍の雄として鳥羽3万5千石の当主として海賊大名と称えられる。波切城は、第2図で見ると太平洋に突出し、此处は近畿・東海・江戸にわたる沿岸航海の要衝の位置で、場所は大王崎の岬の上にあった。その場所は文字通り太平洋の荒波を切るような高台の上であり、正に大王崎の名にふさわしい海の大王の居城の場所といえる。私事ながら、私は1854年元日に結婚までもない妻と共にここに立った。大晦日の波切の宿の鄙びた佇まいと共に、川崎重工で海と船に関わる設計の仕事に携わる者として、忘れられない広大な太平洋と九鬼水軍との出会いであった。既に60年も前のことになる。下の第2図は九鬼氏源流の地である熊野灘に面した紀伊半島南部の九鬼浦から拠点の変遷状況をしめす。



第 2-1 図 九鬼氏拠点の変遷

1. 九鬼浦 九鬼氏源流の地
2. 九鬼分家の進出した波切
3. 九鬼嘉隆の居城としての鳥羽城、第 2 次木津川口の鉄甲船の軍功により 7 千石加増されて 3 万 5 千石 (志摩、摂津野田・福島) 水軍大名
4. 転封となった三田は第 5 図参照

第 2-2 図 大王崎先端



第 2-3 図 九鬼浦から進出した波切 (灯台場所も含む岬の南部半分域が城址か)。



第 2-4 図 大王崎先端、波切城址の碑  
 広大な太平洋を見渡せる大王崎の高台に波切城の城址碑がある。貞治年間 1360 年代に九鬼隆良が築城。鳥羽築城後は廃城?

## 2.2 九鬼水軍の主要な活躍

(1)大阪・木津川口の戦い 九鬼嘉隆の活躍としては、第 1 図に示すように「木津川口の第 1 次、2 次の戦い(1576,78)」がある。第 1 次では正に九鬼水軍の完敗(注 5)であったが、第 2 次では、有名な九鬼の鉄甲船の威力により毛利方を駆逐して、大阪湾の制海権を確保。2 年後宿敵・石山本願寺・顕如は遂に信長の軍門に降った。九鬼嘉隆の技術イノベーション成果である鉄装甲戦艦の投入による勝利といえる。

(2)花隈城の戦い(1578~80) 九鬼水軍は、神戸にも登場する。神戸の中心、JR 元町駅の北側一帯の高台の地に永禄 10(1567)荒木村重が築いた花隈城 (南北約 170m x 東西約 200m 推定)を信長が陥落



させる戦い。ここは東西に3つの曲輪が並び、その周囲は5~10mの高い崖となっていた。相楽園\*10の大楠はその鬼門に植えられたものという。注7。この時、2年にわたる戦いの中で、九鬼水軍の海からの奇襲攻撃の軍功があった。

**2.3 文禄の役(文禄元年 1592~93)** 九鬼嘉隆の最後の晴れ舞台は文禄の役である。秀吉の朝鮮出兵(韓



実物大に復元された亀船  
(韓国海軍士官学校)



国は壬辰倭乱(じんしんわらんと呼ぶ)の前半・「文禄の役」では水軍を率いて日本丸に座乗して活躍するが、日本軍の基地である釜山西方・巨済島周辺の海域・潮流等熟知した名将・李舜臣水軍に大いになやまされる。この時、

第3図 韓国が大きく取り上げる亀甲船。 2015.8 岡本

朝鮮方は「朝鮮方の鉄甲船「亀甲船」の活躍」があったと内外に強調する。然し、反対に九鬼方は鉄甲船を投入していない。興味ある問題だが、韓国では、大型復元模型船を展示する等して事ごとに大きくとりあげている。この問題は別に機会にゆずる。5)

**2.4 鳥羽城** 九鬼嘉隆が文禄3(1594)に築城。関ヶ原の戦いでは西軍(敗軍)についた為、家康の怒りを買って、1600年に自刃。幸い東軍に加担し軍功の在った息子・守隆は2万石加増を受けて5万6千石となり1632年まで居城とした。



次項に示す相続のお家騒動の幕府裁定による転封により九鬼家とはここで縁が切れるが、答志島、菅島などを前にするが熊野灘、太平洋にそのまま繋がる水軍の将の城にふさわしい居城である。

第4図 鳥羽城址

2015.8 岡本 洋

第1、2、4図は、九鬼水軍の基盤が熊野の海そのものである事を示して、やがて来る山国・三田への国替えによる環境の大きい落差を伺うことができる。

**3. 摂津・三田への国替え(転封)**

**3.1 相続争い(お家騒動)** 関ヶ原の戦いが終って30年あまり、嘉隆の子・後鳥羽藩主守隆は、寛永9(1632)年10月、5男久隆の相続を遺言して死亡した。夭折、病弱者を除き相続権利を主張する3男良隆との争は収まらず、幕府に裁定を申し出る。約半年後の幕府裁定は、厳しいもので、「守隆の遺言どおり久隆の相続は認めるとしても、家督争いは不届きとして5万6千石から2万石の減封の上、摂津・三田に転封」という厳しいものであった。更に数日措いて、それを追いかけるように、5男・久隆を2万石で丹波・綾部藩に移封をつたえた。結局、九鬼鳥羽藩の相続争いは、「三田と綾部に事実上分割の上、海から山中への転封」となった。この裁定は1633年5月1日であった。幸いにも彼らは以後約240年それぞれの地に命脈を保ち明治維新を迎えることになる。

### 3.2 山国への転封・三田藩と綾部藩

に二分 九鬼家の源流として、古くは南北朝以前に遡ると言われる出自は別としても、初代・波切城主・九鬼隆良の 1360 年代から数えて、約 270 年もの間、波切から鳥羽と海の世界に生きた九鬼家は、共に三田・綾部という山里の別天地に押し込められることになった。興味深いのは、この東の九鬼水軍に対して、西の水軍の雄としてその名を知られる村上水軍も同様な山の中への転封の処置をうけている事である\*4。来島村上氏は九州・豊後・森(森藩 1.4 万石・来島長親)に押し込められている。そこは九州湯布院温泉と天領日田に挟まれた日本で最も小さい城下町とされる所である。



### 3.3 徳川幕府の鎖国政策、シーパワー制限

既に秀吉により 1588 年に「賊船禁止令」が出されて最早海賊の時代ではなかったが、徳川幕府は全国支配の体制強化を進める一環として、この様に水軍勢力の抑え込みを進めた。キリスト教布教に対する不信感は強く、「大阪夏の陣(1615)」が終り、徳川の時代となるとすぐに、翌年(1616)「欧船の来航を平戸、長崎に制限」とし、「500 石積の軍船禁止」(1609、)となっていた。更にこの年、1633 年には「奉書船以外の海外渡航を禁じ」、「海外渡航者の帰国を制限」している。海外との港を極限し情報・貿易を幕府独占とすることによって利益の独占、キリスト教の進入をコントロール制限する手段を確保したことになる。然し、目を世界に転ずると、正に大航海時代、帝国主義へ向けての資源獲得に向けての大きな世界的な流れが欧州から既に始まっている時である。コロンブスの第 1 回西方航路への出発(1494)から 40 年になるうとしているときに当たり、マゼランの世界一周艦隊も既に 4 年も前 1529 年にロンドに帰着している。

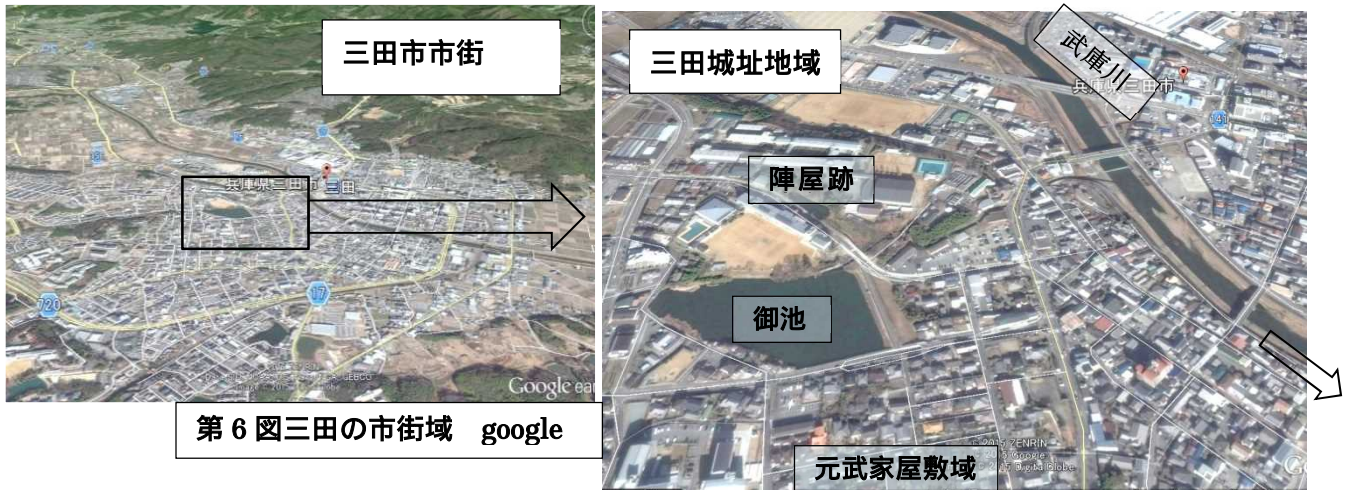
この様な世界の潮流の中で徳川幕府自身はこれらの鎖国政策を監視実行するためのシーパワーの充実には無関心だった。色々考えさせられる。・・・この山国への押し込み転封から三田・綾部藩が解放されるには明治維新までの 240 年間を待たねばならなかった。日本国全体も同じであつた。

## 4. 三田藩の幕末 あとがき、1 参照

#### 4.1. 三田の城と町 1) 山国、寒い

三田領は鎌倉時代の豪族の城から始まり、城下町の三田藩が成立してきた。近世になっては有馬氏等が支配した。一国一城の制度と外様大名である九鬼氏は三田入りしても新城は認められず居城は三田陣屋となった。三田盆地には、北から南東に武庫川が貫流し、その右岸に武家屋敷はあり、その北部の台地に陣屋が設けられた。現状は次図の通り。





第 6 図三田の市街域 google

今、陣屋跡は有馬高校、小学校となっている。ここに城址の石柱がある。その下には御池(約 200 x 100m)がある。その南が武家屋敷となっている。第 5 図と第 1,2 図を対比してみるとその海山の落差の大きさと、江戸幕府の意図もうかがう事が出来る。雪は特に降らないが、盆地の三田は寒いことで知られる。



第 7 図

川本幸民・顕彰碑、九鬼隆義・顕彰銘板、



## 2)山国から退散/三田の発展

鳥羽から三田に国替になったときの九鬼藩家臣団の家族数は 89、明治維新時には 64 家族。この中には廃絶もあるが国替後に、ここの暮らしに耐えかねて藩を退出したのは 12 家族という 7),14).1。更に、例えば最後の殿様・正室は江戸に帰り、以後三田には戻らなかったと言われる。山国生活の無聊と厳しさは格別だったとおもわれる。

この山国も現在は違う。阪神間のベッタウンその他施設の建設・充実が進み、1980 年代から人口増加率・10 年間日本一の発展を記録した。JR 福知山線の複線化で三田大阪は丹波路快速で 41 分で結ばれ高速道路網が整備され、ニュータウンと近代化した郊外都市に生まれ変わった。

## 4.2 三田藩の藩政

1).操船訓練 山国に陸封された「水軍」は、「陣屋の周囲に 700m ばかりの濠を掘り、志摩になぞらえて凸凹をつくり、又陣屋下の馬場近くの三田川ほとりには船小屋を設けて川を塞ぎ止めて船を浮かべて、秘かに操船の訓練を行い再び海で活躍できる日にそなえた。三田藩士は幕末まで素足で通し、「水に濡れた船上では足袋はすべると着用を拒んだ。幕府の厳しい監視下で、「水軍」は、山に居ても海の風習と魂を守り続けた。疎外感という糸で、一族は「結束」という太い綱を縫い合せていた。幕末、遂に悲壮が爆発する。幕府へのうらみから、三田藩は討幕派に回り徳川への復讐を果たす。「幽閉」から 230 年がたっていた。」7)

2). 財政窮状と改革 三田に移封された時には、石高に比して藩士数が多く藩財政はすぐに逼迫した。藩財政は基本的に米収に依存する事から、新田開発がすすめられた。同時に藩は、領民全体に対する再建策として家中町中俵約仕置令を公布している(延宝 8(1668))。更に享保元年(1716)には知行高の半分借り上げの給料カットが行われているが、特産・専売品の無い藩の窮状は好転することはなかつた<sup>7)</sup>。安永 9(1780)には百姓一揆がおこる。百姓一揆は明治 2(1869)にも起こっている。この様に状態の起伏はありながらも時代は幕末・明治維新へと移って行くなかで、登場するのが白洲退蔵、小寺泰次郎である。かれらは三田から神戸における藩政改革、財政対策の主演となって活躍する。

## 5. 三田藩の学問 あとがき、1 参照

九鬼藩に於いては、水軍から次第に学問に熱心な藩へと昇華していったのではないかとと思われる。そして、三田藩で学問の分野では、

### 5.1 「川本幸民(文化 7,1810 ~ M4,1871)を第 1 とする」

といわれる。彼の顕彰碑は第 7 図に示すように三田城址の石柱と相對するように建てられている事でもわかる。その業績より「日本化学の祖」ともいわれる。そこには、「三田藩主九鬼隆国の命で、江戸で蘭学と医学をおさめ、その知識を生かし我が国初のマッチ、写真機、ビールなどの品々を自分で試作した。又「舎蜜」という語に「化学」という訳語を当てたほか、薩摩藩で電信をためしたりしている。これらの実績が認められ、幕府の学問所の教授として招かれ活躍。維新後は三田に帰り英蘭塾を開き故郷の子弟の教育に当たった。東京で没。享年 62 歳」とある。彼の人脈は三田藩に大きく貢献。その第 1 が福沢諭吉といえる。藩主隆義をはじめ白洲退蔵、小寺泰次郎は新時代に生きるための大きな助言を受けた。それは商業の重要性と人材の育成である。維新後の藩主以下の神戸移住、志摩三商会の設立、土地の不動産価値の認識、優秀な人材の育成などはそれによる。

### 5.2 「元良勇次郎は日本心理学の創始者」となる。

元良(杉田)勇次郎(安政 5,1858 ~ 大正元,1912)の顕彰碑もすぐ近くにたてられている。

三田藩には学問教授方としての儒官としての杉田家、白洲家がある。杉田家は三田移封以前から藩の儒官で、鳥羽藩主の学友の一人だったという。杉田勇次郎は、この三田藩儒官の家に生まれ藩校・造士館、兵庫の寺子屋などを経て三田にかえった川本幸民の開いた英蘭塾に学ぶ。この閉鎖により、兵庫で英語を学ぶ。M7 年摂津第 1 公会神戸教会で受洗している。早くから神戸との関わりがあるのは驚きである。その後、新島襄が設立の同志社に 1 期生として入学した(M8)。

因みに、同志社第 1 期生 8 名の内、6 人が三田藩からの若者であったという。ここでも三田藩を上げての向学心への強い思いが感じられる。宣教師の影響を通して進んだ海外の学問へ向けての向学心と、洋行(留学)へ思い強まっていた様にみえる。東京に出た後、元良米子との結婚によりし、元良性になる。そしてロックフェラー財団奨学資金を得て M16.1883 年米国留学。ボストン大学、ジョンズ・ホプキンス大学で心理学を修めた。日本最初の心理学者として M23.1890 年東京大学心理学教授となる。独自の実験心理学を確立した。



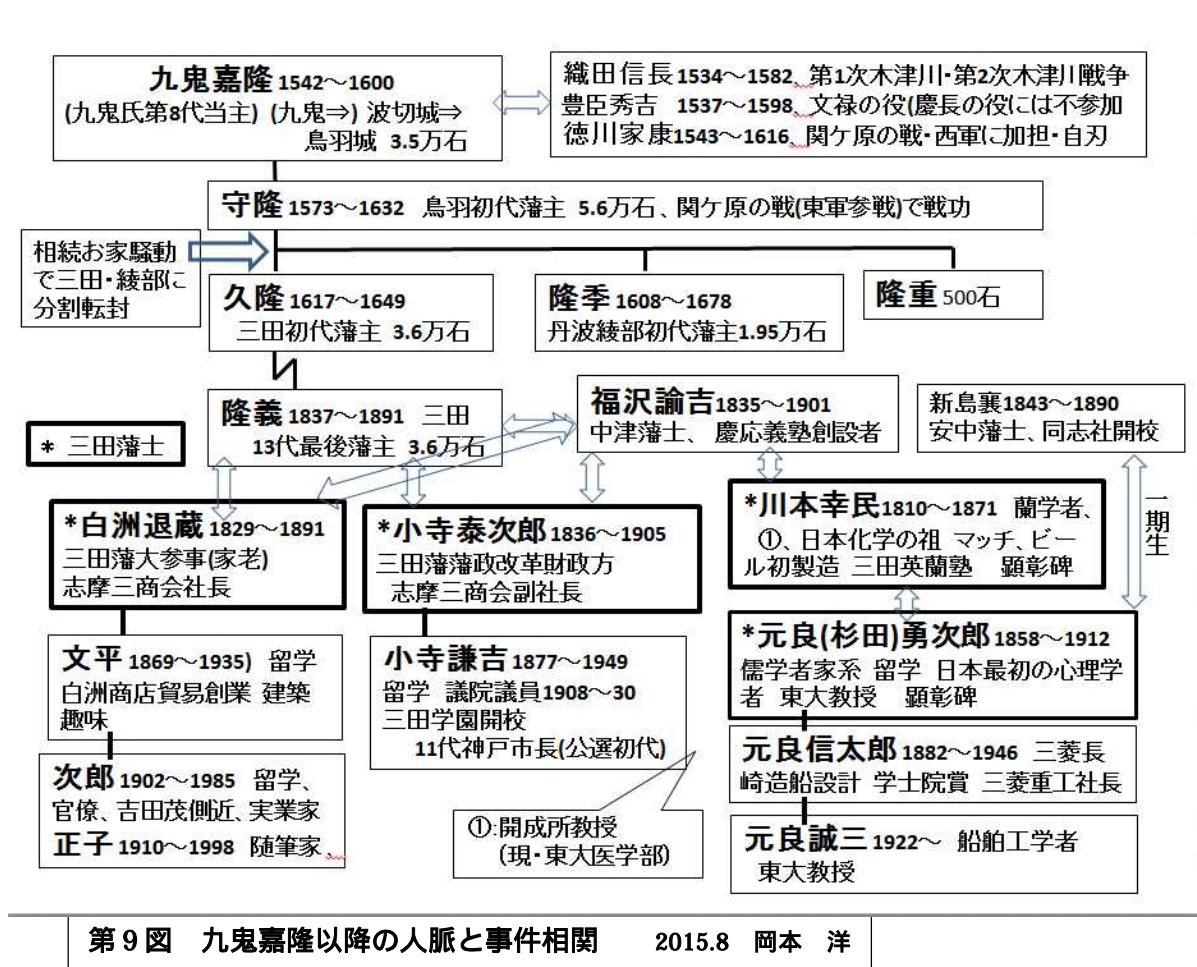
第 8 図元良勇次郎顕彰碑  
三田城址近く



彼の子、孫である元良信太郎、元良誠三については後でふれる。共に船の世界で実業界と東大教授として著名な業績をあげている。

### 5.3 白洲退蔵・藩校教授から藩・大参事(家老)に

白洲家は、尾張徳川家に仕え、軍学、書道に通じていた白洲文蔵は、三田藩江戸留守居役が4代藩主九鬼副隆に推挙した事で、三田藩儒官となる(元禄4・1691)。降ってその子孫・白洲退蔵(文政12,1829~M24,1891)は、藩より選ばれて大阪、後に江戸にて儒学を修める。三田に帰って藩校造士館の教授。然し、幕末政情不安定の時期に軍制改革の献策などから頭角を現し、抜擢されて筆頭家老として幕末・維新にかけて藩政に辣腕を振るう。明治初年には三田県・大参事となり、先見性豊かに藩の舵とりをするとともに、江戸から三田にもどっていた川本幸民を師として元藩士に洋学を学ばせるなど、人材育成に尽くし、神戸に移っては土地提供等で神戸女学院創設に寄与している。



## 6. 神戸への移住

**6.1 商業進出** 第9図には本稿関係者の概略をしめした。ここで注目されるのは、福沢諭吉と九鬼隆義以下白洲退蔵、小寺泰次郎等との深いかかわりである。これは前記したように川本幸民の仲立ちにより始まりお互いの交信、訪問が続いている。

「明治4年5月明治維新の大政奉還により三田県知事となった九鬼嘉隆は今後の藩運営の方針を農業に懸ける「擧藩帰農計画」に置き知事以下家臣家禄5ヶ年分をあてる、として新政府に資金貸付を願い出る。これは認められることなく2ヶ月後には廃藩置県なる。明治5年4月福沢諭吉を三田に訪れた際、九鬼隆義は「廃藩置県後の处世術」を福沢にただしたところ、諭吉は「商業への転身」を勧めたので、



この資本主義的近代精神を容れ、終にはこれが三田藩の輿望となって、一人も官途を求める者なく、皆「帰商帰農」を志した」といわれる。

この福沢の助言を入れて九鬼隆義は白洲、小寺などと共に神戸に移住する。それは、明治4年から明治5年11月にかけての様で、場所は奥平野村(濃城、梅元町7)で五宮神社や勝海舟寓居後址のある山裾にあたる。また神戸中心にある花隈城の東、神戸四宮通りに地所を買い別荘として別邸宜春園にも居を構えた、という7)、14)。

これにつれて、家臣も追隨して家財を一斉に売却して兵庫、神戸周辺に移住店舗を開く者、商工業に従事する者多数にのぼり三田の屋敷町では、士分の存在は僅か十数戸にさびれてしまった、とるされている。正に三田藩の中心勢力が神戸に移住した状況らしい。

## 6.2 志摩三商会の設立と土地所有

1). 志摩三商会 神戸に進出した九鬼隆義以下の一統は、福沢諭吉による「商業への転身」助言(異説もある)の実行にとりかかる。それが「志摩三商会の設立と活躍」である。神戸の東端を南北に、山から海に貫流する生田川の水害対策として、東に付け替える工事が行われたが、その跡地の埋立地の買占めと転売により巨利を得た資金を元にしたと言われる。志摩三商会の名は九鬼家発祥の地・志摩と三田の三から命名されたという。藩主・九鬼隆義を総裁とし、社長・白洲退蔵、副社長・小寺泰次郎が運営にあたった(創業 M5.9)。場所は栄町3丁目で不動産と輸入用薬品の販売を主におこなっている。隆義は別にも六甲山の牧畜とか製塩、石油掘削とか試みるが成功せず、次第に不動産取扱いが中心になっていったようである。

明治6年地租改正による土地所有の自由化と、神戸居留地の開発(慶応3,1868~M32,1899)につれて、その外側の神戸雑居地の開発が進んだが、一般には外人の進出を恐れて土地を手放す人が多かったのに不動産の価値を福沢から教えられた志摩三商会の彼らは、急速に土地所有を進め、巨利を得ることになる。

神戸居留地は第10図に示されるように、鯉川筋と旧生田川(現フラワー通り)との間、西国街道以南の7.8万坪で120超の外国商社が軒を並べ商館貿易が行われた。

「九鬼隆義、白洲退蔵、小寺泰三」らの不動産事業は発展したようで、彼らは富豪へと富を蓄えてゆくことになる。その後形態は変わり、小寺は独立したようで、以後は小寺泰次郎、その子小寺謙吉の活躍に移って行く。小寺泰次郎に関する個人紹介資料では、土地に投資したものが、生田川河川改修によって生じた地価高騰し「大富豪」になった、と記されている8)。他の2名も大きな富を得たはずである。然し、その実態について具体的に纏められたものは見いだせなかった。

具体的金額を伴う資料としては稍降るが、大正3年(1913)の地租納入番付に拠れば1位小寺謙吉(1万5千円)、2位九鬼多隆輝(1万2千円)と夫々2代目が1、2位をしめている。

2). 白洲退蔵・商法会議所会頭就任 このような中、「神戸商法会議所」が初代会頭・神田兵衛門(1841~1921)としてM11年10月に設立されたのだが、2年後に白洲退蔵が7年間(M13.2,1880~M20.6,1887?)にわたり2代会頭に就任している。これは、彼の一族が神戸に於いて勢力を持っていた証左であろう。因みに神戸商法会議所(後に商工会議所)は、M11年に東京、大阪、神戸に設立された。又、この神田兵衛門は姫路市大塩町の大庄屋の3男として生まれたが、慶応3年(1867)兵庫開港商社取締役に着任。初代兵庫県知事伊藤博文の知己を得て兵庫新川運河の建設に貢献した人物である。

3) 土地所有の実態 志摩三商会の活動実態詳細に立ち入るのは本稿の目的ではないが、概要すらも具体的には掴めなかったが、今回の調査の中で、この問題に正面から取り組んでいる研究者がいることがわかった。明石高専の建築科准教授の水島あかね博士である。2012年以降研究継続中で土地台帳、地籍図、行政資料を詳しく当たり、特に資産を増やした小寺泰次郎に焦点を当てて、土地所有情報の

データベース化等を通し明治期の神戸都市形成に与えた影響を明らかにしようとしている。その成果 10.1)、10.2)の中から土地所有図を引用して第 10 図に示した(見やすく一部加筆)。これにより九鬼隆義、白洲退蔵、小寺泰次郎など活動の実態を伺う事ができる。今後の纏めが期待される。

## 7. 九鬼一統の横顔(第9図補足)

### 7.1 九鬼隆義(1837~

1891) 最後の三田藩主。開明的な人物で福沢諭吉に海外図書の購入を依頼して幕府にとがめられたこともあり、西洋文化に関心が高かった。明治維新では鳥羽・伏見の戦い直後から新政府に与して戦っている。キリスト教に強い関心を持ち、遂に M20(1887)に神戸で洗礼を受けている。

### 7.2 白洲退蔵(1829~

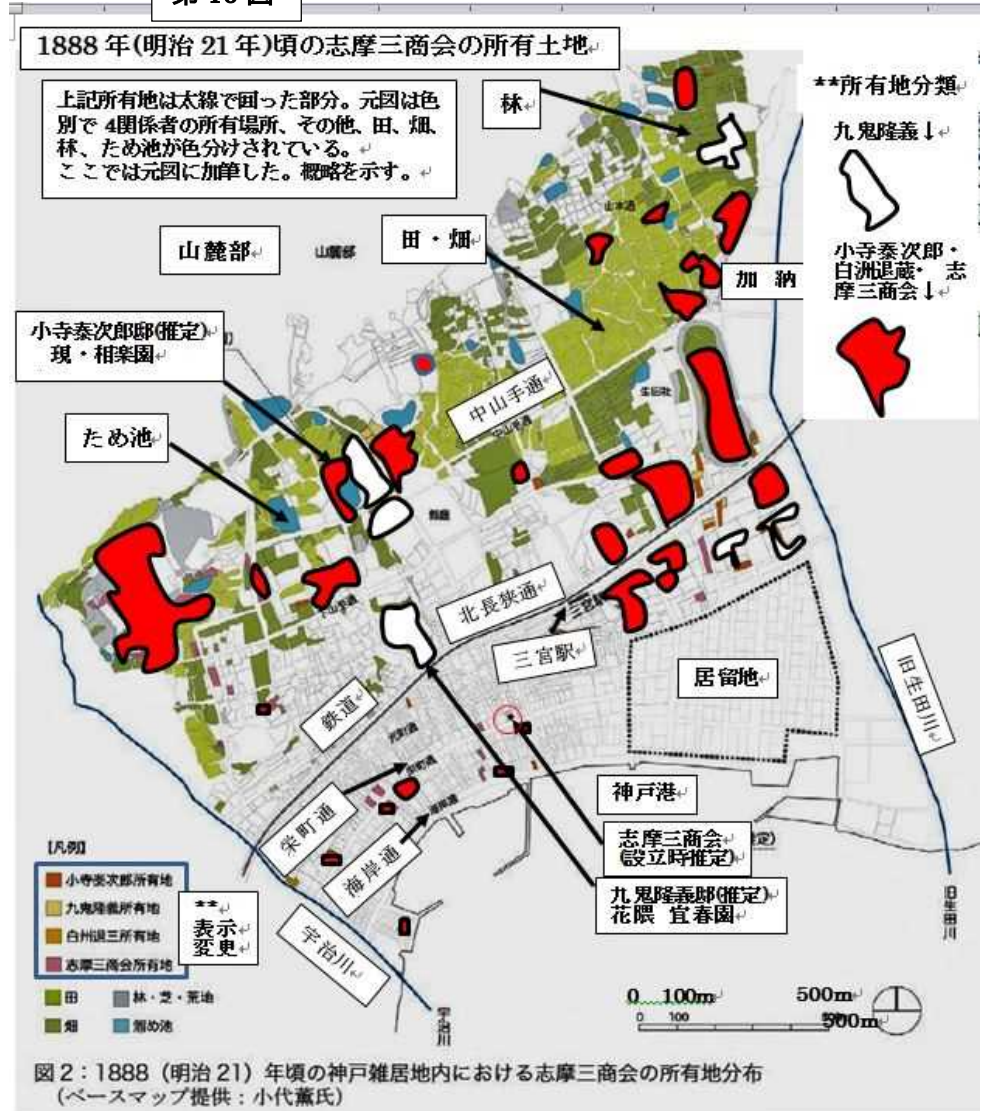
1891) 藩校造士館教授より藩の実力者に抜擢された。志摩三商会の後、九鬼隆義・福沢諭吉の推挙により横浜正金銀行・第3代頭取、岐阜県大書記官をつとめる。

その子・文平(1869~1935)はハーバード大学、ボン大学に留学、帰国後三井銀行・カネボウを経て神戸に白洲商会を創業、綿貿易で巨万の富を築く。

孫・次郎(1902~1985)は神戸一中からケンブリッジ大(聴講生)として留学。大戦後吉田茂の側近としてのGHQとの交渉に活躍。その後実業界で活躍。その妻正子は薩摩出身の海軍軍人・政治家樺山資紀の孫。著名な文化人・随筆家としてひろく知られる。

7.3 小寺泰次郎(1836~1905) 今までの記述を補足すると、父の代から三田・南郷13か村の代官の出。九鬼隆義に抜擢されて白洲退蔵の元で、藩財政の責任者となった。のちには兵庫県会議員を務め、神戸の都市計画に大きな業績を残し、神戸市がのちに神戸株式会社と言われる素地を作ったとされる。巨万の富を得た彼は、得た富からあらゆる方面に多くの寄付をした、と言われるのは救われる。彼に特筆すべきは、福沢諭吉の影響を受け、理想の学園創設を夢見たが、果たさず、その子謙吉が遺志を

第 10 図





実現した。<sup>\*10</sup>

7.4 小寺謙吉(1877～1949)は、父の夢を継ぎ三田学園を創設した。M30,1897より10年間米・ドイツ大、ジョンホプキンス大、独・ハイデルベルグ大、オーストリア・ウィーン大、スイス・ジュネーブ大に留学。衆院議員6期。関東大震災後に早大(3.6万冊)、東大、慶応、法制、中央各大学に多くの本を寄贈。S22(1947)70歳で初代公選神戸市長に当選。神戸貿易博覧会(神戸博、跡地が王子公園)決定。又、神戸港の管理主体を県・市の共同から神戸市単独にするために努力。国と協議の為上京中に急逝。その成果は、

- 1) 三田学園創設の実現<sup>\*10</sup>、
  - 2) 神戸貿易博覧会の成功(S25,1950)、
  - 3) 神戸港の市による管理実現(S26)、(県・市の共同管理より市単独)。
- 神戸国際港都建設法 神戸港の発展 と纏める事ができる。

## 8. 纏めー

8.1 熊野・三田・神戸 熊野から波切、鳥羽へと進出、水軍九鬼氏として水軍大名となった九鬼嘉隆。信長、秀吉、家康と仕えながら水軍の将としての令名を輝かせてきた。関ヶ原の戦いでは親子敵味方に分かれて戦い、自らは敗軍に加担したかどで自ら命を絶つ羽目となるが、息子守隆は2万石の加増で地位を保つという一族の作戦が奏功した。

お家騒動は残念だが、これにより三田・綾部に分封して陸封されながらも、最後は新政府側に加担して明治維新、廃藩置県後も処罰なく命脈を保つ。明治期に成ると華麗な人脈と進取の学問に打ち込んだ成果から、将来政策を誤らず新開港地・神戸に藩を上げて移住。主として不動産投資により巨利を得る事に成功。藩主の抜擢により頭角を現した白洲退蔵、小寺泰次郎は目覚ましい活躍と成果を上げる。かくて、熊野の海から三田の山の中に押し込められた九鬼藩は再び神戸という海に開けた新天地を獲得した、と総括できる。特に明治以降の白洲、小寺の働きは神戸の都市開発、国際港都への基礎を作ったと言えよう。更に付け加えなければならないのは両名の次世代の白洲文平、白洲次郎と小寺謙吉らの大きな働きは国際的舞台でも評価される。

九鬼嘉隆も持って瞑すべしと言うべきと思う。

### 8.2 熊野への回帰、熊野本宮宮司への就任

三田藩は維新後に長きにわたり押し込められた山国から発展の基盤であった海に開けた開港地・神戸への移住を果たし新天地で活躍するが、綾部に移された一族の九鬼・綾部藩も11代続いて、三田藩と同じように無事に明治維新、廃藩置県を迎えた。この九鬼氏一族にとって意味の大きいのは、次のように熊野回帰を果たしている事が注目される。

綾部藩最後の当主九鬼隆備(1834～1897)は、維新後、子爵となるが、資料には「熊野別等修験管領」と記されている。そもそも、九鬼水軍は熊野別等の流れをくむといわれる事から「熊野回帰」を強く感じる。更に、綾部九鬼家はこの隆備の次の宗隆の代となり平成15(2003)に彼は、「熊野本宮大社宮司」に就任、その後長男・家隆が後をついで現在同じく宮司の職にある。これは、特筆すべき「熊野回帰」そのものである。

### 8.3 海・船づくりへの回帰、元良信太郎、元良誠三

杉田勇二郎は元良米子と結婚、元良性となって、終に独自実験心理学を確立、東大教授となった我が国心理学の創始者であるが、それに続く上記の二方は正に九鬼水軍のルーツである造船の分野に大きな功績をあげられている(第9図)。我々造船に関係するものとして、両氏の業績を知らない者はいない。

**元良信太郎氏**は、東大・船舶卒後、三菱造船の設計に席をおきながら、「元良式船舶減揺装置(元良式スタビライザー)」を開発(1923年)した。T15(1926)第16回帝国学士院賞を受賞している。これは「船体中央付近の水中両舷に舵状の一对のフィンを装着し、ジャイロで検出された横揺れの角速度に比例

した翼角を制御し船の横揺れを減らす」ものである。我が国で2隻の実船に設置された後、特許はS.11(1936)に英国のDenny Brown社に譲渡され「クイーン・エリザベス」号や多数の英国軍艦に取り付けられた。快挙と言うべき成果である。のちに三菱重工社長となり経営にも貢献した。

**元良誠三氏**は、東大・船舶工学科卒、海軍技術将校として太平洋戦争中は呉海軍工廠等を経たのち、戦後以来、生え抜きの船舶工学者として教授を歴任。「船体運動、船体と海洋構造物の運動学」を中心に研究業績を重ね、更にこの方面の多くの研究者を指導し世に送り出してこられた。私事ながら私のドクター論文の主査を頂いた先生でもある。その後、長崎総科大学学長も務められ尚東大名誉教授としてご健在である。ここでも自分が、九鬼水軍の大きな輪環の一部と聊かの接点をもった事を感じる。

**8.4.松方幸次郎と神戸女学院** 九鬼隆義はM15、福沢諭吉の勧めで東京に出る。白洲退蔵もそれに従う。そこで福沢諭吉、九鬼隆義の推薦により大蔵卿松方正義より横浜正金銀行(現在の三菱東京UFJ銀行)頭取を命じられる(副頭取:M15,1882.8、頭取:M1883.1~83.2、岐阜県大書記官に転任)注8。松方との人脈をうかがわせる。

(おわり)

**謝辞** ご教示と関連の資料等の提供を頂いた下記の方々に、氏名を銘記し謝意を表します。

- ・高田 義久氏 三田郷土史研究家
- ・前田 賀章氏 神戸史談会 副会長
- ・水島 あかね博士 明石高専・准教授

## あとがき

**1.三田訪問** 本稿の為に、某日、三田を訪問。神戸方面から舞鶴方面に向かう176号線はよく利用したが、これは旧三田市街を迂回しているの、今回は新しい発見が得られた。市立図書館は、三田藩に関する資料が良く整理されていて、しかもデジカメ撮影も赦されて効率的。多くの緑に囲まれた図書館もサービスと共に良い雰囲気であった。三田城址陣屋跡としての有馬高校、同小学校、そこには九鬼隆義、川本幸民、元良勇次郎先生の銘板、顕彰碑が緑に囲まれた雰囲気の中に立っていた。そのふもとに或る桜の馬場、それにつらなる旧九鬼家住宅、資料館では資料を入手共に色々の話を聞く事が出来た。

**2.明治初期の地図調査** 1と同様に神戸市立図書館、と神戸市立博物館で調査した。

\*市立図書館(中央区大倉山)では、15-1)「日本近代都市編設計地図集成 大阪・京都・神戸・奈良」柏書房」の神戸の全図、兵庫・神戸市街図、東部、南部、北部など。



製作年はM.10~S.10。約20頁をコピー。目的のひとつである九鬼邸、志摩三商会、小寺邸、松方邸、



神戸女学院は図上で確認することが出来た。その中から明治 41 年発行の神戸市とその中心部の拡大図を第 11 図に示す。この時既に鉄道は敷設されているが、三宮駅は今駅より西に位置している。

\***市立博物館**(中央区京町)では、事前に調査する「通り、町目」を銘記して対象の地図保管を確認の上で申請し、指定日に出頭という厳重なものだった。今回は東は生田川から西の花隈、北は山麓から居留地の範囲とした。これ等は、各通り、丁目に分かれていて、夫々1m角ほどの美濃紙に各所有者の名前と坪数が明記されている土地原図ともいえるもので、製作は M.21 が大半だが、その精緻さには驚かされた。学芸員によると夫々は庄屋から寄付されたものという。各地図を重厚な会議室の大テーブルの上に広げてデジカメ撮影したのだが、この市立博物館は白洲退蔵がのちに頭取となる横浜正金銀行の神戸支店として昭和 10 年に竣工した建てられた新古典主義建築として登録有形文化財に登録されているものであり、聊か九鬼氏との因縁も感じながらの調査であった。詳細は省くが、調査範囲で、

**九鬼関係の所有土地区画**が実に多いことを具体的にみるこゝがてきた。第 10 図と略一致するのを確認した。多くの区画を個別に購入している実態が把握できた。変わったところでは、中山手通 7 丁目では志摩三商会「林 3 町 7 反 5 畝(約 11,250 坪相当)」というのもあった。

第 10 図の「宜春園相当箇所は 1,597 坪 7 合・九鬼隆義」と記されていた。以下詳細は省く。

ここでの新しい発見は、「**安田善二郎**」名義の土地の多いことであった。方々に広い畑、宅地を手に入れている。例えば、下山手 4 丁目では、県庁の南に宅地:322 坪、370 坪、北東に畑 9 反 5 畝(約 2,853 坪)、その他にも方々に見られた。神戸在住の九鬼一統に比し明らかに安田善二郎は部外者と言えるが、この様な広い土地を購入は買占めと言われるものではないか。**安田善二郎**(天保 9,1838 ~ T.10,1921)は富山市出身で「安田財閥の祖」である。彼は自宅応接間で訪問者に刺殺されている。「奸富安田善二郎巨富を作すと雖も富豪の責任を果さず。・・・」とする斬奸状が残されていたという。東大安田講堂、日比谷公会堂等を寄付しているが一般には奸富と見做されていたのであろう。「小寺泰次郎があらゆるところに寄付をした」という文言が文献上によく見られるが、本人も注意していたのであろう。

## 註

\***註 1 MTS**(海上交通システム研究会)の第 126 回例会 <http://www.mts-matrix.org/index.html>,

(会誌 MATRIX、バックナンバー、No.90 目次)の項参照。

## \***註 2 鉄甲船**

「秀吉の本願寺攻め」(1570~1580)の時に、敵対する毛利方の村上水軍との第 2 次木津川口の戦い(1578)に於いて、秀吉側の九鬼水軍が第 1 次木津川口の戦い敗戦の挽回を期して投入した新型装甲戦艦で、船体上部を鉄板で覆っていたとされることから、通称としてこのように呼ばれる。本願寺攻めの戦いは 11 年の長きにわたる。最後は鉄甲船による勝利による制海権獲得とそれによる兵糧攻めにより秀吉の勝利で終わった。この石山本願寺は浄土真宗(一向宗)の寺院で、現在の大阪城付近にあり、濠をめぐらせた堅固な造りであったとされる。

この鉄甲船については不明の点も多いが、L 21.8~23.6m, B=12.7m, 船体の覆い鉄板 3mm とする記録がある一方で、諸説もある。世界最初の装甲戦艦ともいわれるが、亀船との間に論争もある。

## \***註 3 九鬼水軍、熊野水軍**

**九鬼水軍**は熊野水軍のリーダー「熊野別当の湛増」の血を引くといわれる。その**熊野水軍**は、平安末期に熊野灘を本拠に、源平双方と関係を持ち、紀伊半島・瀬戸内海の制海権を握っていた。源平合戦(治承・寿永の乱、1180~85)では、最終決戦に於いて、平氏方であった熊野の別等・湛増が源氏に付き、源氏の決定的勝利に導いた。

**九鬼水軍**は九鬼浦(三重県尾鷲市九鬼町)を本拠として勢力を拡大した。南北朝中期、九鬼浦に落ち延びた(1346)藤原鎌足血筋の藤原隆信を始祖とし、3 代の時に分家が波切に進出、その後嘉隆(?~1600)に

至って信長水軍(海賊)として活躍、志摩(鳥羽)の領主として(海賊)大名となる。第2次木津川口の戦いの戦功による7千石の加増により3.5万石となる。後に秀吉に仕える。関ヶ原の戦いでは、西軍に付き、家康の怒りを買って切腹して果てる。以後本文参照。1)、wikipedia等

「九鬼水軍発祥の地・紀州九木浦」<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Sakura/2558/>

#### \*註4 村上水軍

瀬戸内海水軍としてよく知られ、そのルーツは7世紀頃にさかのぼる(村上家紹介 村上誠一郎・衆議院議員ブログ)ともいわれるが、Wikipedia などによると、平安時代末期の保元・平治の乱(1156、1160)の後、源為国(村上判官代)が淡路島・塩飽諸島を経て越智大島に拠を構えて伊予村上氏の祖となったとされる。瀬戸内海・特に芸予諸島を勢力範囲とする海賊・水軍として活躍する。

のちに能島村上家、来島村上家、因島村上家の三家にわかれる。戦国期には、因島村上氏は毛利に、来島村上氏は河野氏に臣従。能島村上氏は毛利水軍の一翼として木津川口の戦いに参加。来島村上氏は秀吉の下で独立大名(来島長親 1582～1612、今治・1.4万石)となる。江戸時代においては、能島村上氏・因島村上氏はそれぞれ毛利の下で長州藩船手組となる。来島長親は関ヶ原の戦いで西軍に着いた為、豊後国森(大分県玖珠郡玖珠町)という山国に転封(森藩 1.4万石)、陸封される(来島 久留島となる)。この幕府の措置は、九鬼水軍の場合と同じであった。村上誠一郎(1952～)は村上水軍を祖先とし、1983年より衆議院議員(自民党、愛媛二区、当選10回、東大法卒)。海事振興連盟副会長にある事には、水軍の後裔として海への回帰も感じられる。

#### \*註5. 第1次木津川口の戦い。

毛利方	毛利水軍、小早川水軍、村上水軍	参加 約700隻	損害 不明
織田方	織田水軍 九鬼嘉隆	参加 約300隻	損害 壊滅的打撃*

\*参加武将・8名中7名討死 『信長公記』

第2次木津川口の戦いの両軍の損害は不詳。とにかく織田方は勝利し、制海権確保。

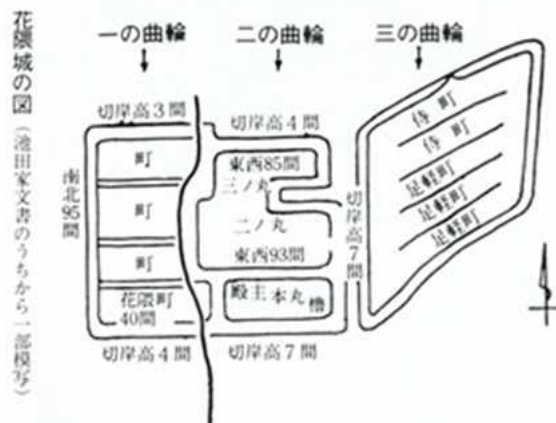
#### \*注6. 亀船の神話 韓国の図書より

「亀船は、われわれ同胞の誇りである。古今東西の歴史で、これほど決定的瞬間にこれほど決定的役割を果たした船は類例を見ない。亀船は、われわれの先賢たちの卓越した創造的伝統の中から生まれた偉大な軍船である。古来わが民族は独特の文化を創造する間に数多くの利器を開発してきたが、中でも亀船が第一であることは間違いない。亀船は国難を何とか乗り切った時、先頭に立った無敵艦である。李舜臣將軍は、壬辰倭乱の海戦で縦横無尽に活躍した百戦百勝し、日本水軍を完全に制圧したが、「亀船こそわが水軍の先鋒になった負け知らずの船である」と、韓国サイドの記述が続く。・・・文献5)

#### \*注7 花隈城 神戸の城物語 (下)より。

・花隈は要害の場所として知られ、「鼻の隈」(はなのすみ)、海に近い高台の端と言う所から、このように名づけられたのだろう。完成した花隈城の規模は一ノ曲輪(くるわ)二ノ曲輪、三ノ曲輪にわかれ、大阪城や姫路城にくらべると、その構造は簡単で戦国時代の終りのころの特徴をよく表わしている。たとえば、

- ・一ノ曲輪は南北95間(けん、約171m)東西40間(約72m)の長方形だが、その北面と南面はそれぞれ3間(約5m)と4間(約7m)の切り立った崖に





なっている。また、二ノ曲輪の北面の岸の高さは約 7m、東西と南面はともに約 12m もあって、一ノ曲輪よりさらに高台に築かれている。そして、一ノ曲輪の東面と、二ノ曲輪の西面の間には水路が通っていて、城の防御をさらに強くしている。

・**現在**、兵庫県庁の北にある、菊やつつじの花で有名な**相楽園**（そうらくえん、生田区中山手通）に、神戸の名木の一つである楠の大木がある。この木は永禄 10 年(1567)に花隈城が築かれたとき、鬼門（城から東北の方向）よけのために荒木村重が植えたものといわれている。同じく元町通六丁目に走水（はしうど）神社があるが、かつて花隈城の栄えたころはこの神社が「モロテ鬼門」に位置したことを伝えている。・・・（このようなところから考えると、花隈城のあったのは「東は県庁の西通、西は下山手 6 丁目、北は山手のバス通りから北へ約 100m、南は国鉄高架線の北あたりの範囲ではなかったかと思われる」）・・・

・**そして翌天正 8 年の 2 月 27 日**、信長は丹羽長秀（にわながひで）ら二人の武將に命じて海上から兵庫の港と花隈城を攻めさせた。しかし城がなかなか落ちないので、丹羽長秀らは池田勝三郎父子を残していったん引き上げたが、**城中の兵糧米は次第に底をつき、夏に入ると餓死（がし）する人たちが**出始めた。・・・ 7 月 2 日、その日の夕方から、池田方は三方から花隈城に総攻撃を加え、夜の四つ（午後 10 時）になって遂に城は落城した。城中には侍が四、五人、そのほかは女・童（わらべ）・雑兵（ぞうひょう）あわせて二百人あまりが餓死したり、討ち死にしていたという。これまた悲しくも、哀れな最後だった。以上 <http://www.graphkobe.jp/detail/039.html> より抜粋

明治になって、九鬼隆義が三田から移り住んだ別邸宜春園（北長狭通 78ノ1）13)というのは、「二ノ曲輪」に相当する場所のようで、現在の花隈城公園の東側にあたる場所と思われる。

**\*注 8 川本幸民** は三田藩藩士。幼い時から頭脳明晰で、努力とチャレンジを惜しまない性格であった。三田藩の藩校・造士館で頭角を現した彼は、19 歳の時藩主九鬼隆国の命により江戸に遊学し、坪井道信の塾では緒方洪庵と共に時代をリードする蘭学者に成長する。のちの東大医学部教授につく。阪大医学部の元とされる適塾を大阪に開く緒方洪庵は、「幸民には及ばなかった」と述懐していたという。

**\*注 9 日本最初のビール”幸民麦酒”** 川本幸民がビールを醸造したのは 1853 年で、その後横浜でビールが造られたのは 16 年後の 1869 年のことである。2010 年に「兵庫県三田市から幸民がつくったビールの復元依頼」があり生誕 200 年記念事業として、小西酒造\*が依頼をうけて復元した。

幸民はの偉大な業績を記した数少ない資料の一つが「科学新書」がある。”幸民麦酒”はこの貴重な文献をもとに研究を進め、出来るだけ忠実に再現した。

幸民は、のちの東大医学部教授にもつくが、生前 3 度も大火に遭い、また幸民の没後東大に寄贈された書籍や記録は、関東大震災によって焼失している。偉大な業績を記した彼の数少ない資料の一つが「科学新書」である。”幸民麦酒”はこの貴重な文献をもとに研究を進め、出来るだけ忠実に再現した。

\*小西酒造は 1550 年創業という兵庫県伊丹市にある日本有数の酒造会社でビールも醸造している。三田藩との関わりが深いとされる。

因みに、幸民の作ったビールは当時川本家の菩提寺であつ浅草の曹源寺で幕末の志士や蘭学者をあつめた試飲会でふるまわれたと川本家につたわっている。以上は文献 12)より編集した。

・・・この文献でも触れられているが、川本より先にオランダ商館長ドゥーフが麦酒らしきものを造っている。然し、本人も「十分発酵させることが出来なかったので、3-4 日しか保たなかつた」と言っている。つまり麦汁の甘酒風のものではないだろうか。

先日の日本経済新聞は「関西に国産発祥地ビール発祥地?」という記事を載せた(2015.9.1 夕刊)。大

阪市教育委員会の説明を引用して 1872 年大阪で初のビールが醸造、販売された「渋谷ビール」だとしている。更に 1869 年ローゼンフルトによる横浜・山手の醸造所解説。1970 年には米人コーブランドが醸造所をつくり生産を始め、これがのちの麒麟ビールにつながる。と記事はつづくのだが、新聞記事としてビールの「商業生産」というとらえ方もあるが、「幸民麦酒」の存在を忘れることはできない筈。日経に忠告した。

**\*注 10 相楽園(と小寺泰次郎)** 第 11 代神戸市長の先代、小寺泰次郎(元三田藩士、本文個所参照)の本邸として造られた庭園、神戸の中心 JR 元町駅の山手・兵庫県庁の山に約 100m(神戸市中央区中山手通 593-1)。M18 頃から築造に着手、明治末に完成。敷地 2 万㎡、S.16 以降神戸市所有、S.18 より国の記念登録記念物(名勝)。池泉回遊式日本庭園。一般公開。飛び石・流れや滝など深山幽谷の風景が見られる。蘇鉄園、樹齢 500 年の大クスノキ、つつじ・もみじも見事。重厚な正門、欧風建築の旧小寺家厩舎(重文)、移築された舟屋型(重文)、茶室浣心亭などがある。

三田から神戸に移住後成功した小寺泰次郎の明治の富豪としての一端を見ることが出来る。現代の個人邸宅としては考えられない規模。小寺泰次郎はあらゆるところに寄付をしたという事と、次項注 7 の三田学園創設の基礎を作った事、息子謙吉を長年海外留学させた事等考え合わすと、単なる富豪でない気骨ある九鬼水軍にも通じる視野の広い人物像が浮かびあがる。又、神戸発展期の活力を秘めた時代の雰囲気も感じられる。

**\*注 11 三田学園** 小寺泰次郎が福沢諭吉の説く理想的学校として設立の基礎をつくり、息子小寺謙吉が実現した。英国のイートンカレッジを模範として三田に設立。校祖: 小寺泰次郎、校主: 小寺謙吉。現在・学校法人三田学園。高校・中学。敷地 16 万㎡。三田市南ヶ丘 2-13-65。

**\*注 12 白洲退蔵の横浜正金銀行・頭取就任** 横浜正金銀行の歩み―歴代頭取、神奈川県立歴史博物館などによる。この頭取ポジションは日銀総裁の登竜門とされる。横浜正金銀行は後に東京銀行、更に東京三菱銀行、現在は三菱東京 UFJ 銀行となる。

**\*注 13 松方正義と幸次郎** 松方正義(天保 6,1835~T13,1924、鹿児島市出身)は、明治期に総理大臣 2 度(第 4、6 代)を務めると共に大蔵卿、大蔵大臣(初、第 2,3,4,6,8,11 代)を長期務め日本銀行を設立した。晩年は内大臣。15 男 7 女の子沢山で、明治天皇から聞かれ即答できなかったという逸話がある。

幸次郎(1865~1950)は正義の三男、妻は、九鬼隆義の次女・好子で共に留学先の米国で知り合いだったという。好子は 6 年間(1884~90)・ワシントンのマウントバーノン女学校(現・大学)に留学している。幸次郎は、鹿児島出身の川崎財閥創始者川崎正造(天保 7,1836~T 元,1912)が、M.2 に創設(1869)した川崎造船所を株式会社化するに当たり、同郷の松方正義に依頼して同氏の 3 男幸次郎が川崎造船株式会社が初代社長(M.29,1896~S.2,1927)となる。幸次郎は東大中退、ラトガーズ大、エール大(「民法」で博士号取得)、ソルボンヌ大卒。第 1 次松方内閣では、首相秘書官。川崎造船社長後は、衆院議員 3 期。上野の国立西洋美術館の母体となった「ヨーロッパで収集した松方コレクション」絵画、彫刻、浮世絵でも有名。神戸では馬車で出社した。松方邸の西隣が神戸女学院で、その西が小寺の屋敷(現・相楽園)。松方幸次郎と小寺謙吉は神戸の政界では当初対立したが、のちに信頼を深めた。三田藩一統の神戸における先見的でスケールの大きい経済活動は、三田藩以来の川本幸民、福沢諭吉、九鬼隆義、松方正義、幸次郎と白洲、小寺等の多彩な人脈により支えられたのが大きい。

**\*注 14.神戸女学院**は M.6 宣教師タルカット、ダツドレー領宣教師によって、神戸花隈村にデイ・スクールとして創設。九鬼家をはじめ一統は初めより交流を深めている。後に九鬼隆義が受洗したのもそれによる。敷地の提供等の援助が続けられていた。そうせつの場合がそれを物語っている。S.8 に西宮市岡田山(現在地)に移転、現在(4 年制大学)にいたる。

**\*注 15.慶應義塾大学**と九鬼家との関係は深い。幕末からの川本幸民と福沢諭吉の交流にはじまる。九



鬼隆義との手紙のやり取り、福沢の三田、神戸訪問、三田藩士の慶応義塾への勧誘と多くの入学、慶応義塾の経営が逼迫した時の九鬼家の経済援助等などがある。多くの関係資料がみられる。以上。

## 主要参考文献

1. 「水軍九鬼氏と三田藩の歴史、九鬼奔流」NPO 法人トヲル九鬼奔流で町おこしをする会 三田市観光協会
2. 「新修神戸市史・産業経済編 総論」平成 26 年 3 月 31 日 新修神戸市史編纂委員会 神戸市発行
3. 「海外留学以前の元良勇次郎」福島大学行政社会学部 佐藤達哉 福島大学生涯学習教育センター年報・第 6 巻 2001 年 3 月 <http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/dspace/bitstream/10270/2878/1/20-72.pdf>
4. 「綾部九鬼藩歴代藩主とその藩士たち」 山崎 巖 綾部史談会々長  
綾部の文化財を守る会 35 周年 記念公演 平成 16 年 11 月 30 日 西町 IT ビル
5. 「亀船」金在瑾 著 桜井 建郎 訳 文芸社 2000 年 5 月 15 日
6. 「村上水軍のその後」 山田義彦 新潮社 2006/3 日本財団図書館 web
7. 「三田藩の歴史」九鬼氏代々の記録から知る摂津国 高田義久 平成 26 年 12 月 神戸市立北図書館
8. 三田関係者の紹介等 NPO 法人 歴史文化財ネットワークさんだ 三田市旧九鬼家住宅資料館
- 9-1. 「開化期の神戸と三田」 中谷 一正 三田市図書館三田藩資料
- 9-2. 「史談史話」関戸独軒文書について 1~6 中谷 一正 三田市図書館三田藩資料
- 10.1 「近代神戸における元三田藩士の土地所有実態と都市形成に関する研究」 水島あかね(明石高専)  
2012~2013 年 科学研究費補助事業 研究成果報告書 平成 26 年 6 月 25 日
- 10.2 「明治期における志摩三商会の土地所有実態」志摩三商会に着目した近代神戸の都市形成に関する研究  
日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) 2015.9 月
11. 「三田の福田先生と三田の九鬼藩主」慶応倶楽部・社中の心 市居嘉雄 2006.年 4 月
12. 「日本橋茅場町で造られた日本最初のビール”幸民麦酒”」小西酒造(株) 辻 巖 生物学 第 89 巻
13. 「文明開化と三田藩の人びと」及び「波乱万丈な三田藩の人々」 前田章賀・神戸史談会
14. 「九鬼家資料」
  - 1) 「三田藩九鬼家諸武士徒士、数代記・廃絶録」 三田市立図書館蔵
  - 2) 九鬼氏 - Reichsarchiv ~ 世界帝王事典  
<http://reichsarchiv.jp/%E5%AE%B6%E7%B3%BB%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88/%E4%B9%9D%E9%AC%BC%E6%B0%8F>
  - 3) 神傳武術 九鬼神流(くかみ しんりゅう) <http://www.misogi.org/kuki.htm>
  - 4) 三田藩、綾部藩 Wikipedia
  - 5) 白洲退蔵 横浜正金銀行の歩みー歴代頭取、 神奈川県立歴史博物館
15. 明治初期の神戸市地図
  - 1) 「日本近代都市編設計地図集成」 大阪・京都・神戸・奈良」 柏書房」

以上